

# 青鳳会資料 椎間狭窄性腰痛の鍼灸治療

平成 29 年 1 月 22 日  
青鳳会講師 吉野 久

## ■ 緒言

今回の主題は、腰痛の中でも腰椎間が狭くなっていることに起因する腰痛だが、この腰椎の椎間狭窄については、われわれ鍼灸師は、レントゲンやCTなどの画像診断ができる立場にはない。

しかしながら、われわれも日頃の臨床のなかでは、患者ごとの腰椎の有様を、触診によって判断している。その結果、腰椎の間隔が狭い・広い、左右に・前後にずれている、傾いている、前彎・後彎が過度である、あるいは少な過ぎるなどの状態を判断しているのである。そしてそのような場合、その腰椎には、おおむね圧痛が生じることも分っている。

いま述べたように、腰痛を訴える患者には、腰椎の整列に病的な変化を来たしている場合がある。しかし、整列の変化がない腰痛患者もある。とすれば、われわれは臨床においては、かならず整列の変化を確認しなければならないといえる。

以上のような、鍼灸治療に特有の事情を考えて、今回は腰痛の鍼灸治療というものを全体的に見渡すような話ができればと思っている。

そういう次第であるので、古典として成書しているものに触れる機会は少なくなるが、了解いただきたい。

## I. 腰部の椎間狭窄とは

腰部椎間狭窄とは文字どおり、腰椎間が狭くなっている症状だが、緒言で述べたように、これはもう少し範疇を広げて「腰椎の並び方に変化が生じているもの」といった程度に理解していただきたい。

これは、腰椎を後方から圧した場合に圧痛が出現することによって判断できるが、このことから、腰椎自体にどんな症状が生じていることが考えられるだろうか。

<表 1>

腰椎の圧痛があるとき考えられる腰椎の症状	腰椎周囲の靭帯の炎症
	周囲筋の炎症
	脊柱管の狭窄
	骨折している

また、腰椎に圧痛がある場合は、以下のような腰痛が起こると考えられる。

<表 2>

腰椎の圧痛がある場合に起きると考えられる腰痛	腰部椎間狭窄症(狭窄だけでなく、腰椎の整列に病的変化がある)
	腰部脊柱管狭窄症
	腰部椎間板ヘルニア
	腰椎すべり症
	腰椎分離症

また一方で、腰椎整列の変化が原因となって起こる症状としては、以下のようなものが考えられる。

<表 3>

整列の変化が原因となりうる腰痛	急性腰痛(ぎっくり腰)
	腰浅・深部筋痛
	梨状筋症候群
	骨盤のゆがみ
	小・中殿筋痛

<表 2>、<表 3>から分るように、腰痛の治療をする場合には、腰椎の圧痛＝整列の変化を考えずに治療することは不可能である。

## Ⅱ. 腰痛と腰椎整列との関連

	腰痛の各症状	腰椎の整列との関連(直接・間接)
1	ぎっくり腰(急性筋・筋膜性腰痛)	+
2	腰部椎間板ヘルニア	+
3	腰部脊柱管狭窄症	+
4	梨状筋症候群	+
5	腰椎すべり症	+
6	(坐骨神経痛)	+
7	腰深部筋痛	+
8	股関節痛	+
9	小・中殿筋痛	+
10	鼠径靭帯痛	+
11	骨盤のゆがみ	+
12	仙腸関節痛	+
13	上体の傾斜・側弯による腰痛	+
14	内臓不調による腰痛	—
15	精神性の腰痛	—
16	その他の腰痛(嘔みしめ癖などによるもの)	—
17	腰椎分離症	—

14 …… 胃の不調時に、野口圧痛点が痛むなど

## Ⅱ. 治 療

患者の傷めている部位・筋を確認する。それと同時に、腰椎の圧痛の有無を確認する。

腰椎に問題がある患者は、腰の痛みと同時に「腰の重さ」をかならず言うので、これも判断の基準とする。

靈樞・經脈第十

督脈之別名曰長淮、・・・實則脊淮、虚則頭重

腰椎が強ばるので重く感じる。治療点・・・長強、あるいはその付近の次衛穴

帯脈穴の左右からの通刺、次衛穴・殿筋に対する刺鍼などによって、腰を全体的にゆるめる。

腹臥位で治療を行なうにあたっては、腹の下に薄めのクッションを置くなどして、椎間を広げるようにする。

腰椎棘突起間、横突起間に置鍼する(10～20分間)。

靈樞・經脈第七十八

八風傷人、内舍於骨解、腰脊節、須理之間、爲深痺也。故爲之治、鍼必長其身、鋒其末、可以取深邪遠痺。